

生涯学習講座における社会的な講座の有用性について

—くひきこもり>現象に関する講座から—

檜垣 昌也

はじめに

2000年以降くひきこもり>という行為そのものにスポットをあてた報道がテレビメディアでも頻繁に取り上げられ、同時にくひきこもり>対策(治療・援助)の専門家が脚光をあびてきたという経緯がある。このような流れの中で、2001年厚生労働省が「ひきこもり対策のガイドライン(暫定版)」を示した(このガイドラインは2003年に完成版が出ている)。このガイドラインの目的は、くひきこもり>者が人間関係の修復や人間関係を構築するための援助や、就労支援まで、彼らの状態に応じた援助方法を示したものである。このような社会の流れを、朝日新聞の記者である塩倉裕は「ひきこもりを税金で援助する時代の到来」(塩倉2003)と述べている。

この分野でのもっとも代表的な研究者としては、『「社会的ひきこもり」～終わらない思春期～』の著者である斉藤環を挙げることができる。斉藤は「(社会的ひきこもりは)二十代後半までに問題化し、六ヶ月以上、自宅にひきこもって社会参加をしない状態が持続しており、ほかの精神障害がその第一の原因とは考えにくいもの(斉藤 1998:25カッコ内筆者)」と規定しており、厚生労働省のガイドラインもこの定義を引用している。

また、くひきこもり>は、現在、状態像を表す言葉としてとらえるのが一般的であるが、このような状態の者の人数を把握するのは困難である。というのは、犯罪や虐待といった現象と同様に暗数部分が相当数あると推測できる。現状では、相談件数しか把握することはできない。

筆者はくひきこもり>に関する統計調査的研究はしていない。くひきこもり>という言葉のもつイメージがまだ確定していない現状において、くひきこもり>の相談件数を見ても、この現象を良く説明しようとは思えないからである。また、厚生労働省がガイドライン作成のために行った相談機関に対する調査では、調査対象者の規定からは外れる者でも、くひきこもり>と自認するケースがある。筆

者の主要な関心は、くひきこもり>と呼ばれる状態やその行為者に対して、我々がどのようにふるまうのか(社会的反作用)、それによって当事者たちはどう対応していくのかを探ることにある。

さて、筆者は、本年SOA(聖徳大学オープンアカデミー)¹⁾において、『ひきこもり』現象にみる若者・家族・地域の現状と課題』と題した全5回の社会人対象講座を担当した。これまでも生涯学習に属する講座でくひきこもり>に関する講座というのは散見される。たとえば、カウンセリングなどの講座でのくひきこもり>に対する理解や、単発の講座でくひきこもり>を知ると題したものである。これらの講座は、くひきこもり>を心の問題としてとらえ、くひきこもり>を個人の問題として理解し、くひきこもり>という状態を呈する人々に対して、どのようにアプローチするか、援助するかといったことを学ぶ試みといえる。いしかえればくひきこもり>などの状態を呈する人々に対する、スキルアップ・ブラッシュアップといった個人の技能の向上に焦点を当てた内容といえる。

本講座はこれら、学ぶ側の技術向上を目的としていない。くひきこもり>を主題材にしているが、このような現象をとりまく社会のありよう、および、今後の地域社会のあり方を展望する、いわば社会的な内容であった。この全5回の講座で、受講者があるのか心配されたが、7名の受講申し込みがあり、開講することができた。

本稿は、この講座の内容を検証し、今後の生涯学習の場での社会的な講座の有用性について検討するものである。

1. 講座開講の意図するもの

以下は、公開講座案内に掲載した本講座の紹介文である。筆者は、本講座を担当するにあたり、この講座がひとつのくひきこもり>支援方法を学ぶ講座ではないことや、当事者の援助の場でもないことを提示した。

みなさんは「ひきこもり」と聞いて、どのようなイメージを持たれるでしょうか？そして、そのイメージはどのように形成されてきたのでしょうか？この講座は、そんな疑問から出発します。若者・家族・地域の立場から、イメージが持っている影響をさまざまな事例から検討します。これらの検討を通して、地域に課せられた課題を明らかにし、新しい支援のかたちを提示します。

SOAニュース²⁾には以下のような紹介文が掲載されている。

「ひきこもり」問題は、当事者とその家族だけの問題ではありません。この講座で、受講者の皆様と一緒に考えたいことは、「ひきこもり」現象を通して見る現代社会の諸相です。そこで、経験者やその家族を招いてのディスカッションも取り入れる予定です。社会貢献の担い手として、SOAの皆様大変期待をしております。皆様の知的欲求のみならず、社会貢献欲求にも応えられるように頑張ります。どうぞよろしくお願いいたします。

そして、講座内容としては、以下のように提示した。各講座では概ね下記の2項目を話すことを考え、5回の講座とすることにした。しかしながら4回目の講座は経験者の体験談を聞くことができるようになり、下記10項目の内容を4回で話すこととなった。

1. 「ひきこもり」とは何か
2. 「ひきこもり」イメージの研究
(ひきこもりに対する人々の反作用からラベリング論へとつながる)
3. 行政の取り組み
4. 医療・福祉との関係
5. 不登校と「ひきこもり」とニート
6. 社会学者の取り組み
7. ラベリング論的視点(発想の転換)
8. 社会福祉援助技術論的視点(グループワーク)
9. 地域福祉論的視点
10. 支援の現状とこれから

本講座を開講するにあたり、筆者は、＜ひきこもり＞と呼ばれる現象あるいは問題を、当事者やその家族といった

その状況に直面している者たちだけの問題としてではなく、この社会を構成しているすべての人々の問題としてとらえなおして欲しいと考え、上記のプログラムを組んだ。われわれ社会の側が＜ひきこもり＞というものに対して抱くイメージを講座の出発点として、まず当事者や家族ではない社会の人々の側の意識に注目した。そして、当事者としてではなくこの講座の受講者を、地域社会におけるリーダーになりえる人材として考え、受講者に広く複眼的な視野を持っていただくことを目的とし、講座を展開したいということをアピールしたつもりである。結果として、7名の受講者で開講という運びになったのだが、この人数をどうとらえるのかはさまざまな解釈が成り立つであろう。本稿においてはこの解釈については言及を控えることとする。

2. 各回の講座内容と事後評価

受講者には、毎回レジュメを配布し、講座終了時にコメントをいただいている。ここでは全5回の講座の内容を、レジュメと授業内容、受講者のコメントから振り返ることとする³⁾。

1) 第1回

①レジュメの内容

＜ひきこもり＞とは何か・＜ひきこもり＞イメージの研究

- ・＜＞をつける意味。
＜ひきこもり＞の定義や言葉のもつイメージは確定されておらず、今後が変わっていくだろう。
- ・＜ひきこもり＞という言葉
辞書では・・・「ひきこもり」という項目はない。
英語・・・「withdrawal」精神医学の用語
- ・事件との関係
2000年問題
- ・厚生労働省の動き
『10代・20代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン(暫定版)』2000年
- ・＜ひきこもり＞に関する図書の傾向分析
- ・本日のビデオ
ニュースアイ特集 2000年放送
ニュースステーション特集 2000年放送
関連 ニュースアイ特集 2000年特集(戸塚ヨットスクール)

②授業内容

受講者の自己紹介(受講動機の把握)。＜ひきこもり＞の

様態をレポートした番組と、戸塚ヨットスクールの紹介ビデオ視聴。筆者が<ひきこもり>とカッコをつけて標記する意味、<ひきこもり>という言葉について、2000年に<ひきこもり>と関連付けられた事件が頻発し<ひきこもり>という現象が大きく取り上げられた。これを受けて、厚生労働省も<ひきこもり>に対する行政の対応のためのガイドラインの作成に動き始めたこと。

③受講者のコメント

戸塚ヨットスクールに関しては30年位前から話題になっていた。生きる厳しさを知る事はいいのだが、あの人生哲学を押しつけられたのではうんざりする。多様な生き方があっていいし、(出てくるのを)待つ事も大切だが、果たしていつまで待てるのか、50歳になって病気でなくひきこもってられるのか。社会に出ていけるきっかけがあるのなら、やはり社会に出て、自分の力で人生を生きていけるようになってほしいと思う。何だかんだいっても経済的な自立は必要だし、どんな生き方があるのだろう(カッコ内筆者補足)。

いろいろな立場で価値観で物を考え、それらを総括することで、自分の考えをさらに深めていくため先生が持っているものをぜひ教えていただいて、さらに深めていきたいと思っています。

世の中に色々な価値観、考え方が存在するということをおこのような場で改めて感じ考えさせられることができありがたいことです。

興味深いビデオでした。色々な人(ビデオ内や受講者)の意見が聞けて勉強になりました。今日出た皆さんの意見をもっと深いところまできいてみたいと思います(カッコ内筆者補足)。

④事後評価

第1回目の講座では、本講座の目的を改めて受講者に伝え、5回の講義内容を説明した。そして、レジュメに示したように、<ひきこもり>が社会的に話題になった初期のニュース番組(ニュースアイ)での特集を視聴してもらった。次に戸塚ヨットスクールを扱った特集を視聴してもらった。視聴後に受講者に感想を述べてもらったのだが、レジュメの内容を講義するために短時間となってしまった。しかしながら、受講者のコメントに見られるように、多様な「価値観」「いろいろな人の意見」を聞くことができたという

ことで、当初の目的である、社会の側がどのように<ひきこもり>をみているのかということの一端を伝えることができたのではないかと思います。

ビデオ視聴後に講義で話をした「< >をつける意味」を理解してもらえたのではないかと考えている。

また、戸塚ヨットスクールのビデオは<ひきこもり>を前面に押し出した内容ではなかったが、受講者には多様な価値観の存在と、どの価値観立っていても差し支えないということを理解してもらうには意味のある教材ではなかったかと考えている。

2)第2回

①レジュメの内容

<ひきこもり>とは何か・<ひきこもり>イメージの研究

・メディアの<ひきこもり>の扱われ方

図書分析

テレビ分析

人々のイメージ形成

・民間支援の動き

・行政の動き

厚生労働省

文部科学省

・本日のビデオ

ニュースステーション特集 2000年5月30日

2000年

福祉ネットワーク心の相談室「市役所が中心ひきこもり支援」2003年4月29日放送

長田百合子氏の支援

②授業内容

前回、時間の関係で視聴できなかったニュースステーションで上げられた特集を視聴してもらう。ここでは、コメンテーターの「ひきこもりはゼイタク」という発言が放送後議論になったことを紹介した。次に、受講者には認知度が低かった長田百合子氏を扱った番組を視聴してもらう。長田氏の活動は、<ひきこもり>当事者の自宅を訪問し、当事者の<ひきこもり>状況を“改善”させるものである。この活動は、大きくマスコミにも取り上げられた。<ひきこもり>に関する言説者の中では芹沢俊介や吉本隆明らが長田氏らの活動を“引き出し屋”と位置づけている。ビデオ視聴後の授業では、筆者が過去に調査した<ひきこもり>に対するイメージの研究[檜垣 2004]を例示しながら、図書の出版傾向として、2000年以降に増加していることや、<ひきこもり>は改善すべき状態であるという内容

がタイトルから読み取れるものが多いことを説明した。またテレビの報道傾向は、＜ひきこもり＞状況の紹介から、改善させる試みの紹介へと、放送内容が変わってきていることを示した。そして長田氏の活動を視聴した学生が持つ＜ひきこもり＞イメージについては、おおむね長田氏の活動に肯定的なイメージをもつ学生が多かったことを話している。

③受講者のコメント

「＜ひきこもり＞はゼイタクか？」という問いに対する自身の考えを書いてもらった。

ゼイタク、引き離す・・・その通り、但しどこまで面倒を（親が）見続けるかが問題？

“ぜいたく”といえば“せいたく”だと言えるだろう。働かなくても食べていけるだけの財力が親にあるのをわかっているのも事実だと思う。テレビを見てるだけでは、なぜひきこもっているのかが伝わってこないし、散漫な感じがした。他のニュースステーションの企画で、同じコメンテーターかどうかかわからないが、“親に迷惑をかけているのがわからないのか”というコメントがあった。その時の方がズキッとしたし、世の親は傷ついただろうなと思った。今の私にはもう一つピンとこない。“ぜいたく”だけど、でもね・・・という感じである。

「ゼイタク」という概念をどうとらえるか？ということになると思うが、たぶん色々な方々に世話になりっぱなしでやりたい事をやっている、現実からかけはなれていと言いたかったのかもしれない。表面だけみたらそうかもしれないが、その一言で全てを網羅できるものではない。

ひきこもりに対するいろいろな支援アプローチの仕方があることが分かり、興味深かったです。「ひきこもり」とされている方々の幼児期の環境(特に人との関わり)と、これまでに支援やアプローチを受けてきた方々のその後について(ご本人がどのように感じているのか)知りたいなあと感じました。

「ひきこもりはぜいたく」というのはわかるような気もするし、ひきこもりの人たちにとっては納得できないだろうな～という気もします。ぜいたくしたくてひきこもっているわけではないと思うし、でもやっぱり生活して

いけちゃうからひきこもれるわけだし・・・と。私の考えていうのは全然まとまってないですが、なんとなく「弱さ」ってものは存在するのかなと思います。長田さんの厳しさで、なぜ更生(この言葉使っていいのか?)できるのか何故親だとダメなのか・・・その辺りの先生の考えがきけるといいなと思いました。

④事後評価

今回の講義での受講者のコメントには、「＜ひきこもり＞はゼイタクか？」という問いに対する自身の考えを書いてもらった。したがって、コメントはこの「ゼイタク」ということに対する各自の意見になっている。『ゼイタク』という概念をどうとらえるか？というコメントに代表されるように、個々の「ゼイタク」という言葉に対するイメージが違うことが読み取れる。はっきりとした「答え」を求める受講者にとっては、スッキリしない内容であったかもしれない。

＜ひきこもり＞は、ほとんどの場合、親と同居しているか、親の所有もしくは親の出資による部屋での生活をしている。したがって、ほとんどの場合、親の経済的なサポート(Personal investment)がなければ成立しないということは容易に考えられる。

「＜ひきこもり＞はゼイタク」と見る人々は、われわれはいずれ親元を離れ経済的にも自立しなければならないという社会通念に則した見方をする。しかしながら近年は、親と同居する未婚の母やパラサイトシングルなど、多様化した生活スタイルが出現している。彼らにとって、これらの生活スタイルの中で＜ひきこもり＞というスタイルは最も寛容しがたいスタイルといえよう。しかしながら、受講者のコメントでこの議論に「スッキリしない」のは、単純に「『ゼイタク』＝経済的自立をしていない」ということでは了解しきれない思考が働いている結果であろう。「ぜいたくしたくてひきこもっているわけではないと思うし・・・」という意見にみられるように、この現象は、表面的にとらえるだけではわからないことを意識していることがうかがえる。

3) 第3回

①レジュメの内容

不登校と＜ひきこもり＞とニート・社会学者の取り組み・ラベリング論的視点(発想の転換)

不登校のとらえ方
文部科学省の方針転換
不登校現象の社会学

フリースクール

韓国の不登校事情(代替学校)

ニート支援

フィールドとしての〈ひきこもり〉

親の会・経験者の語りから

視座の転換・・・ラベリング論

・本日のビデオ

福祉ネットワーク心の相談室「市役所が中心ひきこもり支援」2003年4月29日放送

②授業内容

今回は、行政が行う〈ひきこもり〉支援の現状の一例をビデオで見てもらった。このビデオは、行政が民間支援団体や医療機関と連携しながら、支援活動をする一つの事例が紹介されていた。の筆者が聞き取りした、厚労省、文科省の取り組みを紹介した。レジュメの内容では、不登校を例示し、その文科省の不登校に対する見方の変遷(病気→怠惰→誰にでも起こりうる)を紹介し、フリースクールの位置づけの変化(行政との連携)や、韓国の不登校事情として代替学校が急激に増加していること、そして〈ひきこもり〉とニートの関係について筆者なりの見方(〈ひきこもり〉の判定基準の拡大化→ニートというカテゴリーへ)を例示した。そして、このようなラベル(不登校・ニート)を介した人々の相互作用に着目するラベリング論を、有用な視点の一つとして紹介した。

③受講者のコメント

ラベリングのお話について

いろんな角度からお話を伺って“ラベルを貼る側に病理がある”という先生のお話しにうなずきました。

親として、地域の住民として、このワナに陥らないように注意しよう。

わが子には、もっと広い目で広い視座(?)で見守っていかうと思いました。本日はありがとうございました。

一度逸脱したら大変だという思いはある。学校に行っている時間に家にいる事に罪の意識を抱いてしまうこともよくあることだと思う。身体の病気は平然と口に出せるが、精神の病気は偏見が強く、親も閉じこもってしまいがちになるのではないかと、それでは私はどうなのか。偏見を持っていないとはとても言えない。自分にも自分の子にも世間並みを求める。が、良妻賢母を求められてもこたえられない。むずかしいと思う。

最近教師サイドではラベル(不登校に対して)を貼ることが原因とは思わずともおかしいのではと思っている方が多くいます。1ヶ月に1日休んでも12日(年内)になるじゃないか・・・先生方だって20日の年次休暇を消化する人もいるし。ただどちらかという親が不登校にならないで【と】2, 3日休むととても神経質になって休まないようにしすぎるため「悪」を植えつけることもあるのではないかと思います。責任転嫁しているのではありませんが・・・(不登校は今50日以上ではないかと思います・・・私の思い違いかもしれません)たしかにラベリングのとらえ方にも一理あると思いますし、それだけでもないようにも思います。

教育の場でも、「指導」という言葉が薄れ、「支援」という言葉がクローズアップされていますが、ひきこもりについても同じことがいえるような気がします。教師という立場を離れ、“レッテル貼り”“偏見”というものがいかに人間の心をゆがませるか、このように勉強する機会が得られたことを幸せに感じます。

④事後評価

受講者のコメントにもラベリング論に関するコメントが多く見られたのは筆者の意図するところでもあった。受講者それぞれにラベリング論的視点の受け止め方が多様であったが、これは本講座が目指す、“一元的ではない視点の提供”ということから考えれば妥当な反応であったと考える。ラベリング論がもっともよく説明するのは、ある者がある否定的なラベルを貼られることにより、貼る側と貼られる側との相互作用の中で深化していくような状況である。したがって、このような相互作用の視点に注目することによりはじめて可視化する。ひきこもる原因に注目したり、ひきこもる個人の心理的な問題を断片的にとらえるには精神医学的視点や心理学的な視点をもっともよく説明できるわけであるから、受講者の「ラベリングのとらえ方にも一理あると思いますし、それだけでもないような思います」というコメントは、妥当な反応である。

4) 第4回

①レジュメの内容

経験者の視点からみた〈ひきこもり〉現象

ゲスト

A氏 27歳

1979年生まれ 千葉県在住

現職 (株)A アソシエイト フロアチーフ

これまでの人生

- ・ 小学校時代のこと
- ・ 中学校時代のこと
- ・ 適応指導教室(行政の不登校対策)について
- ・ 進学・中退について
- ・ アルバイト経験
- ・ 周囲の人々との関係
- ・ 医療とのかかわりについて
- ・ 現職に至るまでの経緯

これまでの人生で“影響をうけたモノ”

親・学校・友人・異性・職場・音楽や本・・・

②授業内容

この日はA氏のライフヒストリーを語ってもらったのでここでは、A氏のライフヒストリーを引用する。

表 A氏のライフヒストリー(A氏作成のものを筆者が修正)

小1～4 7～10歳	休みながらも登校
小5～6 11～12歳	新任の女性教師と合わず、休みがち。しかし、友人が支えになり通い続ける。
中1 13歳	親・学校が急に厳しく。部活所属なし。いじめに遭う。2月から完全不登校。塾へ行く。
中2～中3 14～15歳	塾を辞める。主任・担任が家庭訪問、適応教室・学校の保健室登校等
高1 16歳	学校への興味を失う。バイトに精を出す。バイトをクビに。
高2 17歳	不登校が続き。同棲生活。バイト先でのトラブル。
高3 18歳	ほぼ不登校。バイトはクビ。10月、自主的退学。自殺未遂を図る。精神科受診。
99年 19歳	彼女と別れ。約5ヶ月の入院生活。隠居生活。万引き。自殺未遂。再入院
2000年 20歳	数日間バイト。
2001年 21歳	母親の紹介でバイト。仕事を任される。バイト掛け持ち。異動→辞める。
2002年 22歳	別なバイト。親とのトラブル。家出。数日ボランティア。
2003年 23歳	数日のバイト
2004年 24歳	<ひきこもり>
2005年～ 25歳～	バイト一ヶ月半。現在のバイト(2月から現在まで)

檜垣2006：116より

③受講者のコメント

今回のコメントはA氏への手紙という形式にしたため、講義に対するコメントはなかった。

④事後評価

A氏は、自分の体験を話すのはあまり経験がないということで、事前の打ち合わせからかなり緊張していたのだが、実際講義内で話してもらったところ、時間が足りないくらい多く語ってもらうことができた。当初の予定では、質疑応答の時間を多くとる予定であったが、5分程度しか取れなかった。受講者の方からのコメントは、小学校、中学校での辛い体験から現在生き生きと仕事ができるまでを、人前で話すA氏に概ね好意的なものであったが、考え方の甘さにA氏の今後を心配するコメントもみられた。筆者は、A氏が今の仕事を続けるにせよ辞めるにせよ、また現在は<ひきこもり>状態ではないが、様々な要因(特に周囲の反応)で、また<ひきこもり>状態になることもあるかもしれないが環境、時期、人間関係は日々変化しているので、状況は悪くなるだけではないだろうとコメントしている。今回の講義の評価としては時間配分について事前にもう少し打ち合わせする必要があったと思われる。

5) 第5回

①レジュメの内容

地域福祉論的視点・支援の現状とこれから

- ・ 厚生労働省のガイドラインの立場
社会福祉援助技術の展開過程
- ・ 地域福祉の時代といわれる所以
Community Organization論
「ニーズ・資源調整説」
「インターグループワーク説」
事業やサービスに関係する機関・団体・グループ・個人の相互関係を改善促進し、連絡調整を推進する技術
「岡村重夫理論」マレーロスの紹介
「個人は社会制度によって規定される社会的存在であるが、同時に社会制度を変更し、新設する主体性をもつ」
- ・ 地域社会がかかえる課題・・・おわりに
他者理解と自身の立場の表明
タスクゴールとプロセスゴール
内発的発展段階論
ラベリング論的視点の理解
- ・ 本日のビデオ

NHK福祉ネットワーク「生きづらさ」を聞いてくれ
2006年6月13日放送

②授業内容

最終回となる今回は、第3回にビデオで紹介した、行政の支援の流れから、地域福祉の考え方を紹介した。現在は

地域福祉の時代といわれる。それはなぜかをCommunity Organization論(CO論)からインターグループワーク説にいたるまでの理論の展開を岡村重夫やマレーロスの視点を紹介しながら説明し、地域の問題として<ひきこもり>をとらえる視点を提示した。今後の展開としては、<ひきこもり>は当事者、家族に収斂される問題ではなく、彼らをとる人々との相互作用で問題化することも理解してほしいことと、受講者一人ひとりが地域社会・それぞれの現場の中で中心的役割を担ってほしいことを示した。そして、<ひきこもり>を中心課題とした内容ではなかったが、“生きづらい”と感じている人々を取り上げたビデオを見てもらい、今後の各人の課題としてもらった。

③受講者のコメント

今日の講義はやや難しめで、頭の中を整理しないとコメントが出ません、すみません。ただ市町村がひきこもり対策に動き出した事はとても大きい事だと思いました。人口7万人の役所でできるのに、どうしてうちの地元ではできないのか、やらないのか、少子化や高齢化を考える上で、やはりひきこもり、ニート問題は重要な事だと思います。

本当に受け続けられてよかったと思います。一期一会という言葉、重みをしみじみと感じています。今日のビデオは参考というか、勉強になりました。やはり「そのまますで自分で受け入れる」という事はとても大切だと思いました。

ビデオを見て、20代～40代の人達の叫びを観て、いろんな事をポイントとして感じさせられました。キーワードの1人ずつの役割を、ミクロの視点でみてゆき、それを実践に移そうと考えています。もっと勉強もしていきたいと思いますので、続きがあればうれしいです。本日は有難うございました。

④事後評価

資料を配りながらの講義であったので「やや難しめ」の講義であったかもしれない。地域福祉論的な視点は、やや具体性に欠けたと反省している。しかし、今後の展望として地域福祉的な視点の提供は必要であると感じている。たとえば<ひきこもり>を「社会参加しない状態」と定義する場合、その社会参加はなにも学校や職場だけではなく、さまざまなものが考えられる。ボランティア活動、NPO、生涯学習、自治会、町内会、婦人会、趣味・スポーツ活動など

の地域社会への参加や、政治、行政、NPO、NGOといった広域社会への参加も挙げられよう。<ひきこもり>状態の者にこれらの活動へのアクセスの機会がないとしたら、地域住民が果たす役割は大きい。これらの視点をもう少しわかりやすく話すことが今後の課題である。

おわりに

われわれは、ある事象や現象、問題とされることに直面すると、そのもっとも妥当であると思われる原因を探してしまう。しかしながらその視点は、本当に正しいものなのだろうか？他の考え、原因はないのだろうか？という、一見“常識”と思われるわれわれの視点を<ひきこもり>という現象を題材にして、見直す作業が本講座であったと思う。各回の受講者のコメントにみる本講座での収穫は、「いろいろな事」「さまざまな考え」を見聞きできたことであると考え、筆者の話だけではなく、普段はなかなか見る機会がないと思われる番組のビデオを通して、多種多様な視点(たとえば、原因論として医学的には理解できないケースも、人々の相互作用の場面では理解できる場合があるなど)を提供できたのではないだろうか。

このような社会学的な視点の提供は、われわれの日常生活のさまざまな問題に対する対応にも少なからず貢献できるのではないだろうか。

本講座の準備期から、どれだけの人が注目をし、また受講を希望してもらえるかという不安はあったが、実際開講することができ、受講者は少数ではあったが、毎回コメントを書いていただき、各回ごとに振り返ることができたのは筆者にとって大変大きなことであった。

このような社会問題的テーマに対しても関心を持ち、最後まで受講していただいた受講者の皆様に感謝申し上げる。今後も地域での住民であると同時に、地域創造、コミュニティ創造の実践者として活動していただけたらと願っている。

注

- 1) SOA(聖徳大学オープン・アカデミー)とは、地域社会への貢献と社会人の生涯学習支援を目的に平成4年より開設されているものである。
- 2) 本講座は会員制であり、その会員向けに年2回、公開講座の情報等を知らせる広報誌である。
- 3) 受講者の個人的な情報が記述されている部分もあり、その部分については筆者が削除・修正をしている。

参考文献(講座内で紹介したものも含む)

- 市川一宏・牧里毎治『地域福祉論』ミネルヴァ書房 2003
 奥地圭子 2005 『不登校という生き方』NHK出版
 川口漕人 2001 『俺たち「ひきこもり」なのかな？みんな、ど

うなん?』ビイング・ネット・プレス

齊藤環 1998 『社会的ひきこもり—終わらない思春期』 PHP
新書

塩倉裕 2000 『引きこもり』ビレッジセンター出版局

芹沢俊介 2002 『引きこもりという情熱』 雲母書房

檜垣昌也 2004 「<ひきこもり>イメージの研究」『淑徳大学
大学院研究紀要』11号

檜垣昌也 2005a 「<ひきこもり>言説の分析—ラベリング論
的視座から—」『淑徳大学大学院研究紀要』12号

檜垣昌也 2005b 「<ひきこもり>現象に関する研究—ラベリ
ング論的視点の<ひきこもり>分析への導入—」『現代の社
会病理』第20号p.18

檜垣昌也 2005c 「<ひきこもり>という言葉の再検討 —<
ひきこもり>分析の視点の明確化にむけて—」『聖徳大学研

究紀要短期大学部』第38号

檜垣昌也 2006「<ひきこもり>者の適応類型の研究—逸脱者
ラベルに対する<ひきこもり>者の反応」『現代の社会病理』
第21号

Becker, H. S. 1962, *Outsiders*, The Free Press. 村上直之訳
1978 『アウトサイダーズ』新泉社

宝月誠 1990 『逸脱論の研究』恒星社厚生閣

森田洋司 2000 『「不登校」現象の社会学』 学文社

山本功 2004「人びとの反応が逸脱を生み出す<ラベリング
論>」 矢島正見・丸秀康・山本功編『よくわかる犯罪社会
学入門』学陽書房

吉本隆明 2002 『ひきこもれ』 大和書房

(2007年1月11日受理)